



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1927, 7(3): 241-250

ISSUE DATE:

1927-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183235>

RIGHT:

## 新著紹介

### ○地理教材研究第九輯 大正十五年十二月廿日地理教

材研究會、東京目黒書店發行、定價二圓三十錢

教材研究の第九輯が出た、いつもながら地方篤學の人々の眞面目な研究が満載されてゐる、本書收むる所都合十八篇、二九四頁。北九州諸都市の地理學的考察をはじめ、高松、酒田新潟、岸和田、宇品等の港市の考察が多く、地形學的考察が僅かに二篇で、人口分布に關するものが二篇、自然と人文との關係を論じたものが三篇ある、いづれも熱心にして精細なグラフや地圖が入つてゐるが、研究の方法否、發表の形式が何れも大同小異であつて、地理教材研究タイプとでも云ふべきものが出來かけてきた、これは果して慶すべきことであらうか。蓋し教材の研究なるものは、平易にして見やすき事實を懇々圖表にするだけで能事終れりとするものでなからうと思ふ。予は西川君が更に大英斷を奮つて鑑別さるゝ程度を高めて頂きたいと考へる。(藤田)

## 雜報

### ○滿洲にある朝鮮人の數 滿洲に於ける朝鮮人の九〇

%は農民にして、其餘の自由業務及無職者として、全滿洲に

新著紹介、雜報

分布せる數は想像外の大多數にして二重國籍を有するもの全數の三分二以上に達す。其外は普通朝鮮農民として南北滿各地に散在するなり。

吉林省延吉道を中心として、北は牡丹江沿岸に沿ひ南は朝鮮豆滿江岸に沿ふて最大數の住民農民が、其地域内に散在して農を主要生業とし次は東支鐵道阿城方面より綏芬河に至る間の住民は、鎮山労働者鐵道職工として従事するもの多數なり奉天省方面に至りては東邊道を中心として一概に日本政治區域を離れ奥地に入り込み水稻高粱耕作を行ふ。

斯して滿鐵沿線に沿ひては少數の日本資本下の小作人にして交通便利を離れて行くに従ひ比較的鐵道沿線農民より生活程度高くして生活安定をなしたるもの相當にあり。又北滿洲にて鎮山方面に従事するものは農業者數に及ばざるなり。

朝鮮人分布數を擧ぐれば左の如し

一、南滿洲管内(日本治下)關東州 九七三

滿鐵屬地 八、九三三

領事館區 三〇、四八七

小計 四〇、四〇三

二、北滿洲領事館區内 三、八八一

支那側行政區域及前述の奥地に住する二重國籍及朝鮮農民の數

(支那側及日本側調査數)

一奉天省區内 二二二、四八二

(特別區域)

二、吉林省區內

二九三、四七九

三、黑龍江省區內

一〇、七四五

小計

五二六、七〇六

最近信頼すべき確實なる數字統計は左の如し

(南北滿日本政治下の數は前記のものを以て標準とし支那行政區域内)

一、奉天省區内(特別區域)

三五六、七〇〇

二、吉林省區内

九三六、〇〇〇

三、黑龍省江區内

一三〇、五四〇

四、蒙古(内外)

三、〇〇〇

計

一四二六、二四〇

滿洲全人口數に對して約六、七%位にして彼等の男女性別は略同數にして北滿方面の朝鮮人は男性七五%に女性二五%の割合なり而して働き盛りの朝鮮人口數は七五%位にして其中女性は一七才以上の處女を有するもの極めて少數なり、それは支那地方土人の脅迫、處女拉去等に依り防禦策として知己の未婚青年に結婚するか、或は有力なる地方本土人に出嫁せる故に此の狀態の現狀を現はせり。(金麟德)

○蒲の穂

東蒙古の鄭家屯附近、遼河上流の各所の水泡子(池)から蒲の穂がとれる、内地の北海道産に比べて遙に長大優良で、長七時乃至十五時、太き周圍一時半乃至三時に達す夏期早く出るものは質惡しきも十一月頃に出廻るものは良品多し、當地方にては夙に之を用ひて支那製紙原料又は枕の芯

となしぬたるが近來は棉花代用として苧麻蒲團又はクツシヨン用とし又寢臺用にする、多少硬化し易き缺點あるも夏産蒲團に適す、産額は鄭家屯附近にて年に百五十萬斤、奥地百五十萬斤に達し、百斤につき邦貨三圓五十錢也といふ(一斤は百四十匁とす)。

○山東の鶏卵

山東の鶏は近來種の改良と洋雞種の繁殖とを見るに至つて、産額の増加著しきものあり、就中服店、青州、周村三市場に出廻る鶏卵は品質、山東省中にて最優に位し、上海卵と貶稱さるゝ間にありて一見本邦内地産と殆ど等しきものあり、頗る好評を博し、需給關係頗る良好となり農家も亦其の刺激によりて競ふて雜種を飼育するもの多く一家平均十羽以上を飼育するに至れり、さきに筆者が山東平原縣を旅行したる當時の實見に従へば、鶏の品種は極めて惡しく、矮小なるもののみにて、一村の中にも稀に飼ふものを見當る位なりしに、平原の旅宿へ卵を持來つて仲買に渡す農民は引きも切らず、其數誠に驚くべき巨額に上るに驚きしが今や青島より日本への輸出は年に十五萬箱(一箱三六〇個人)にも達するに至れり、今後は其改良によりて驚くべき數量を輸出するに至るべしと考へらる。

○蘭領東印度の石油

昨年原油の上半期輸出高五十三萬五千九百十七箱に對し本年(一九二六)上半期輸出高四十五萬一千九百九十八箱、中十五萬箱は日本へ仕向けらる、産地は東北ボルネオ也、つきに石油は昨年上半期に十三萬三千箱を輸出したるに本年上半期には十四萬二千箱を輸出し、主と

して新嘉坡、支那へ仕向けられたり、輸出港はバレームバン、パリツク、バン、バンカラ、ランタン等なり、輕油は昨年上半年に三十七萬五千桶なりしが本年上半期には同じく三十七萬三千立に達し新嘉坡、シブラルタル、日本、比律賓等へ仕向けられたり。

### ○印度人の綿布消費力

印度全人口三億二千萬の中印度教徒二割、回教徒二割、其他一割と大別するが、人民の服裝は大同小異で、何れも日本服や洋服のやうに仕立上げたものを用ひないで、布の儘で身體に巻付けると思つてよい、頭に被るターバンの如きは幅二尺位で丈は非常に長く六、七十尺もあるのをぐる／＼まきつけてゐるのだ、一ケ年に男一人は腰巻數約五碼、上衣約三碼、ターバン約四碼を平均に消費し女は腰巻六碼、上衣四碼胸衣其他二碼、何れも十二碼を用ひる、小兒は二分一でよいが、一年二回の更衣をするから、大人と同じ量を消費するから、十二碼の三億二千倍で三十八億四千萬碼は、印度人の最低消費量である、印度内地の手織生産高を除いて、過去四ケ年間に平均三十二億萬碼が輸入されてゐる、購買力が増加しさをへするならば、この國は世界的に綿布のよいさばき口である。

### ○ヤクーツク共和國事情

ヤクーツク共和國とは舊のヤクーツク州で、レナ河の流域をなしめ、西はレナ及エニセイ川によつてエニセイ地方と界し、南はレンスコ、アンガルスク地方と界し、南東、及東部は極東地方と界する、シベリア地方中面積最廣く、人口最稀薄、氣候最寒冷、交通最不便

且最研究されてゐない所である、ヤクーツク市の年平均氣温は〇下十一度で極寒地 Verkhoyansk では零下十六度、一月の平均温度〇下五十度最低温度〇下六十三度で寒暖計に用ひる水銀の如き冬の三ヶ月間は凝結して下ふ。

序に云ふ、水銀は攝氏〇下四十度で氷結する、アルコールならば〇下六十度までしか役にたつゝめ、トロールがペンタシならば〇下九十度及二百度まで凝結しない、恐らくこのいづれかを用ひるのであらう。

ヤクーツク地方は帝政時代罪人追放にはあつらへむきの地で植民なんかは顧みなかつた、土着住民はヤクト人二十三萬及行政の中心地に住む露人一萬六千、等を住民として、この外にツングース、ユカギル、チュクチ人等が狩獵、漁業乃至遊牧をやつてゐる、ヤクト人と露人は南部地方に密集するから北方は大體廣漠無人でたゞレナ河其他の川に沿ふて住民があるにすぎない。

冬は極めて嚴寒であるが、夏は比較的氣温が高く空氣が乾燥してゐるから農業はヤクーツク市よりもやゝ北方まで行はれる、しかし收穫は少いから、食糧はイルクーツクから取寄せる、北方コルイムスクでは魚及獸肉が常食で穀物パンは非常な美食である、諸川の流域には牧草が豊富なので牛と馴鹿とが主として遊牧される、いづれも野獸狩をやる、そこで獸皮がヤクーツクの主なる輸出品となる。

天然資源は未だ殆ど手がついてゐない Aldan Vilui 及 Lena 下流に砂金及金鐵を産しザイリユヤ地方では金の外にプラチ

ナがでる、アルダン河上流地方の金産地の發見は近年の事で將來を囑望される、交通不便であるのは全く密林のためであるが、ヤクーツクからイルクツク間二、七六〇露里（一露里は我九町四十四間）に亘る道路が一本、それが唯一の公道であるとはレナ川の舟運あるのみである。

ヤクーツクからアルダン高原を横斷して黒龍江畔ルフロゾオを連れる鐵路が計畫されてゐるが、容易なことではない、むしろオホツク海岸のアヤン港から三百露里でアルダン支流マヤ河上流のネリカンまで鐵道をつけ、それからヤクーツクまで水運による鐵道が早くつくかもしれない。

アヤン港はニコライエフスクの北方にある良港である、邦人のこの方面に注意を向くることをすゝめる、も一つ面白いことはレナ河口から夏期ベーリングを通つて太平洋への航路開通の可能性のあることである、これは將來に於て尤も見込のある航路であるといふのであるから、これ又邦人の注意を惹つてはならぬ地であらうと思ふ。

○佛國の石炭業 十八世紀の末以來の發達にして一七八九年には產出高二十四萬噸に過ぎざりしも、一八六〇年に八百三十一萬噸となり、一八八〇年にPade-Cala縣の探炭設備完成したるが爲め、產出年額一躍して一九、三六二、〇〇〇噸に達し、爾來毎年増産して一九一三年には四千萬噸を超過するに至れり、大戰後、炭坑の四分三は敵軍に占領せられたると、從軍に基く炭坑夫の減少により、一九一五年には千九百五十萬噸に激減せるが、戦争の要求に従ひ苦心し

て一九一七年には二千八百九十萬噸を産せり、休戰當時、佛國の石炭工業は組織的に破壊されたる坑口二百二十に達し、生産額は戰前の二分一にもなり、十萬人の坑夫及其家族は糊口を失ひ四十億法の損失を蒙りしも、其後漸く面目を一新し一九二二年にはNord及Pade-Cala兩縣の炭坑復活し、一九二三年には部分的に、數回の炭坑罷業ありたるも、産出額三千八百五十萬噸に達し、兩縣の産出は三割三分を増加し、一九二四年に至り初めて戰前の生産額を凌駕して四千五萬噸となり、其内Lorraineの産を控除しても尙、一九一三年度の生産額を超過するに至れり、一九二五年の探炭額は四千八百五萬四千九百噸にして、この内北部兩縣の産出尤も多く、ロレーヌ縣より五百二十六萬九千噸を出せり、一九二六年は恐らく五千百萬噸なるべく、外國よりの輸入は二千五百萬噸に激減することゝなれり。

佛國の埋炭量は二百億噸と稱せらる、之を米國の埋炭量、三兆八千億噸、英國の千九百億噸、RED地方の二千億噸に比べれば物の數なられども、現在の推定埋炭量を以てするも猶二百年間僅に佛國民を支へうべしと考へらる。

○ロープ運河開通 マルセイユとローン河間の水運の必要上、此兩者を聯結するロープ運河の開鑿は一九一一年起工され大戰中休止してゐたが、遂に一九二六年十月二十三日開通式をあげた、この運河の實益は從來マルセイユに陸揚された貨物の運賃が非常に高つた爲、マルセイユ、リオン間を水運でやつて之を低減するのであつたが、其の結果はマルセ

イユのヒンターランドが自然擴張される、第二にマルセイユの工場地帯を漸次ベール湖畔に移轉し、植民地から移入される原料で、製油業、サホン業、製糖業、製粉業を發展せしめてこの地域を一大工場地帯となすことである。

### ○リオデジヤネイロとサンパウロ

紐育リオデジヤネイロ間には紐育港ホドソン河對岸ホッケン棧橋より二週一回の便船あり、十二月乃至十三日にして達し、最低一等船客船賃一人につき二百五十弗、米國收入税五弗リオデジヤネイロにてホテルの上等なるは風呂無單室一日に付最低五弗以上、食事付なりといふ、リ市は人口百四十萬、ブラジル中央政府の所在地にして輸入商品の集散港たり、多數の卸賣商店あり事實上全國に涉り代理關係の連絡あり、全國到る所に工場を有する製造會社の多くの事務所あれども、同地より北部地方に對するビジネスに理想的位置に位し南部地方にては、サンパウロに他の中心地あり。

リ市よりサンパウロ間は時間十時間汽車賃及座席料合せて十弗、ホテルの宿料はリ市に等し、この市は海面上三千呎の高地にあり人口五十七萬五千、ブラジル第二の大都市にして、商工業の中心地たるのみならず、南米中最富裕且發達せる中心地の一也、伯刺西爾に於て最新式鐵道設備の中心地にして珈琲業旺盛を極め、斯業はサンパウロ州經濟生活の基礎也、鐵道によりて背後地たるサンパウロ、パラナの兩州、ミナスゲレス西南部地方に對する連絡の完備せるはブラジル第一の稱あり、其外港たるサントスは(汽車にて二時間賃一弗三十

仙、座席料二十五仙、距離四十八哩、人口十萬の港なるが、珈琲輸出港として世界第一位にあり。

### ○南阿聯邦のプーアホワイト

南阿聯邦の歐洲人口は百六十七萬二千六百六人(一九二六年)の中で、約十二萬以上の貧窮に沈める白人が居る、この階級は蘭人系開拓者の子孫で、移住の最初には、かうした落伍者は居なかつたが、一八七〇年グアイヤモンド坑が発見され、又金鑛業がこの地方に起るや、南阿に經濟革命が起つて、農業に従事してゐた奥地の白人は、こゝに落伍者としての第一歩を踏んだ、白人は農業では土着の農民と競争しても勝てない、失業して都會に流れ込むやうになつた、やがて南阿戰爭(一八九九—一九〇二年)のために、農業に従事してゐた白人は一齊に貧窮者の群に墮落されて、普通の歐人とはちがつたプーアホワイトなる特殊階級が出來て來た。この地の土人は今日では其の能力も發達して準熟練勞働に於ても歐人と競争するやうになつて來たので、勞働の方面から云つても、プーアホワイトは到底淨み上げる機會を失ふことになつてしまつた。白人と有色人との間の自然競争となる時、白人必しも優者ではないといふ證據左である、南阿聯邦政府は何とかしてこのプーアホワイト失業者救済問題を解決せんと努力してゐるが、人文地理學の上から見て、其成行は注目されねばならぬ點であると思ふ。

### ○大正十四年十月一日國勢調査の結果による日本内地の人口(五)

愛知、靜岡、山梨、滋賀、岐阜、長野

愛知縣

三三九、四九〇

名古屋市

六八、五八

東區

一七、三〇

西區

一五、三三

中區

二七、八〇〇

南區

一六、〇五五

豐橋市

八、三七一

岡崎市

四、五五五

一宮市

四、四四六

愛知郡

五、六六

下之一色町

八、四四三

鳴海町

八、六六六

各村合計

三、八五九

東春日井郡

一一、七五五

勝川町

八、四四三

小牧町

一一、九四四

守山町

八、六六一

品野町

六、六三三

瀬戸町

三、三九

各村合計

四、三三三

西春日井郡

五、六〇〇

西枇杷島町

八、三三三

清洲町

三、九六〇

第七卷

第三號

三頁

七〇

各村合計

四、三三三

丹羽郡

八、八八

布袋町

七、五五

犬山町

二、五五

古知野町

三、七七一

岩倉町

八、七六六

各村合計

四、〇五五

栗栗郡

三、六六六

宮田町

四、五五五

淺井町

四、六六六

木曾川町

一〇、一〇三

各村合計

一三、五五九

中島郡

六、九三三

稻澤町

三、七五五

奥町

五、二九

起町

三、八八

萩原町

六、四四三

祖父江町

二、六六

各村合計

四、一四四

海部郡

一五、三三三

津島町

一五、六六

蟹江町

一〇、一〇一

知多郡

一八四、三三

半田町

一七、三三

龜崎町

一四、七三

大府町

九、〇六

有松町

二、三三

大高町

四、四九

横須賀町

八、八八

八幡町

九、四八

大野町

二、九三

常滑町

九、三三

西浦町

五、八五

内海町

五、三三

豐濱町

六、四四

師崎町

五、三三

河和町

五、三三

武豐町

五、八五

成岩町

二、八五

岡田町

三、六三

各村合計

五、一五

碧海郡

一四、七六

安城町

三、〇三

高濱町

三、四四

柳尾町

五、五五

矢作町

一、三三

知立町

九、〇三

刈谷町

一〇、三三

各村合計

三、一〇四

幡豆郡

六、七六

西尾町

一六、七六

平坂町

八、八五

一色町

一五、六三

吉田町

七、三三

各村合計

三、七六

額田郡

四、八八

福岡町

三、四四

各村合計

五、三三

西加茂郡

四、六六

舉母町

二、六六

各村合計

五、九三

東加茂郡

三、三三

足助町

三、三三

各村合計

六、一五

北設樂郡

三、〇三

田口町

三、五五

本郷町

一、八八

各村合計

六、八八

南設樂郡	七、一〇六
新城町	七、二二六
各村合計	二、九四八
寶飯郡	三、四四一
御油町	一、三三三
赤坂町	一、五五五
豐川町	九、四三三
牛久保町	五、六七七
下地町	六、〇八八
國府町	五、三三三
三谷町	六、一三三
蒲郡町	三、四二二
形原町	六、七四六
各村合計	七、四四四
溫美郡	三、〇〇〇
二川町	一、〇六〇
田原町	三、三三三
福江町	一、〇三三
各村合計	五、四二二
八名郡	三、三三三
大野町	一、六六六
各村合計	三、〇〇〇
靜岡縣	一、七七一
靜岡市	八、七三三

濱松市	六、二二二
沼津市	三、八〇〇
清水市	四、六三三
賀茂郡	六、三三三
稻取町	六、〇一一
下田町	七、六六六
松崎町	四、三三三
各村合計	六、〇三三
田方郡	一、四二二
三島町	二、〇三三
修善寺町	五、三三三
伊東町	三、四四四
網代町	三、〇〇〇
熱海町	一、〇四四
各村合計	三、〇三三
駿東郡	二、六三三
原町	六、四四四
御殿場町	九、三三三
小山町	一、九〇〇
各村合計	八、三三三
富士郡	二、八三三
吉原町	三、六六六
大宮町	二、〇三三
各村合計	五、六六六

庵原郡	七、一〇〇
富士川町	五、九三三
蒲原町	八、七四六
由比町	九、九三三
興津町	八、九七七
各村合計	四、四三三
安倍郡	一、八三三
志太郡	一、五二二
藤枝町	二、〇三三
岡部町	五、六六六
島田町	二、七三三
青島町	八、八八八
魏津町	二、七三三
各村合計	六、七三三
榛原郡	二、九三三
相良町	二、〇六六
川崎町	二、〇三三
金谷町	八、七〇〇
各村合計	六、三六六
小笠郡	二、三六六
掛川町	一、〇三三
横須賀町	五、八三三
堀之内町	四、〇三三
各村合計	五、二三三

周智郡	四、九三三
山梨町	二、九三三
森町	六、九三三
水窪町	七、〇三三
各村合計	三、九三三
磐田郡	一、四三三
袋井町	三、八三三
見付町	九、四三三
中泉町	九、七三三
掛塚町	五、四三三
二俣町	六、四三三
各村合計	一、〇三三
濱名郡	一、六三三
笠井町	四、七三三
舞阪町	四、〇三三
新居町	八、一三三
雄踏町	六、七三三
白須賀町	四、二三三
各村合計	一、四三三
引佐郡	五、〇三三
氣賀町	八、四三三
金指町	二、七三三
三ヶ日町	九、四三三
各村合計	三、四三三



地球

山梨縣

甲府市	六,七五五
東山梨郡	六,三三四
勝沼町	二,六〇〇
各村合計	七,七四〇
西山梨郡	二,〇〇〇
東八代郡	五,七三三
石和町	三,六三三
各村合計	五,七三九
西八代郡	四,〇五五
市川大門町	六,〇〇九
各村合計	六,〇〇六
南巨摩郡	三,〇二二
鯉澤町	四,九七七
各村合計	四,九七五
中巨摩郡	八,三〇九
北巨摩郡	七,三三三
韮崎町	四,六五五
各村合計	六,一七〇
南都留郡	七,八五五
谷村町	八,三三一
各村合計	八,三三一
北都留郡	五,八五七
上野原町	六,四四四

第七卷

第三號

二頁

七二

滋賀縣

各村合計	四九,四三三
大津市	六三,四三三
滋賀郡	三,七九〇
膳所町	四,一四一
堅田町	九,六四四
各村合計	三,四七八
栗太郡	三〇,八九九
草津町	四七,六八三
各村合計	六,一三〇
野洲郡	四三,五五五
各村合計	五九,九八三
甲賀郡	三,四七七
水口町	五,五五五
石部町	七,七五〇
土山町	二,七〇七
長野町	三,七一九
各村合計	五,三三三
蒲生郡	五,一四一
八幡町	九,二九六
日野町	七,七〇四
各村合計	六,四九九
神崎郡	七,八五五
	五,一八七

愛知郡

八日市町	六,四二一
各村合計	五九,七五七
愛知郡	四八,八四四
愛知川町	五,六三三
各村合計	元,二五三
犬上郡	五,七四八
彦根町	三〇,五五五
高宮町	五,九一〇
各村合計	四,六三三
阪田郡	七,一六〇
米原町	五,四八六
長濱町	一三,五五五
各村合計	五,一五五
東淺井郡	五,六八八
伊香郡	三,一三三
木之本町	五,七三九
各村合計	二五,五〇六
高島郡	四六,九七七
今津町	五,四四四
大溝町	二,五〇一
各村合計	元,〇九三
岐阜縣	二,一三三,五五五
岐阜市	八,一九〇三
大垣市	五,三六六

稻葉郡

加納町	一四,六三三
各村合計	八,二七三
羽島郡	七,〇七七
笠松町	七,三五一
竹ヶ鼻町	五,一三〇
各村合計	四,七六六
海津郡	二四,九七七
高須町	三,四〇七
今尾町	五,三三三
各村合計	一六,一五五
養老郡	三,四四四
高田町	四,三〇〇
各村合計	二七,一五五
不破郡	三,三三三
垂井町	二,七五五
赤坂町	三,四四四
各村合計	二七,三三三
安八郡	四,二五五
神戶町	三,一五〇
大藪町	二,三〇〇
墨俣町	二,三三三
各村合計	三八,四六〇
揖斐郡	五,八六六

揖斐町	三、七五五
各村合計	四、一五二
本巢郡	四、七七一
北方町	三、四九六
各村合計	四、二七五
山縣郡	二六、八八五
高富町	二、四三〇
各村合計	六、四〇五
武儀郡	六、五二二
美濃町	八、四三三
關町	一〇、四四四
管田町	二、五八八
金山町	二、五八八
各村合計	七、五九〇
郡上郡	五、五九〇
八幡町	七、七五五
各村合計	四、七五五
加茂郡	七、八〇四
太田町	三、三三〇
川邊町	四、六五五
八百津町	六、四〇四
各村合計	三、四四四
可兒郡	四、五九〇
御嵩町	二、九八〇

報

桑山町	一、四三三
多波町	三、二二三
豐岡町	六、三三四
廣見町	三、八三三
各村合計	二、五八五
土岐郡	七、三三三
土岐津町	五、一五八
多治見町	一〇、八四〇
笠原町	六、一五五
下石町	四、五五五
駄知町	六、三三三
瑞浪町	四、三三三
泉町	六、一六六
各村合計	二、六六二
惠那郡	二、一〇三
中津町	一、六〇五
坂下町	五、一三三
付知町	六、二二二
苗木町	三、五五五
長島町	四、六〇〇
大井町	五、六六一
岩村町	四、〇七五
明知町	三、一六六
各村合計	三、八七七

益田郡	三、九三三
萩原町	四、五五五
小坂町	三、九〇〇
各村合計	三、六六六
大野郡	五、三三三
高山町	一、六七五
大名田町	五、〇〇八
各村合計	二、五五二
吉城郡	四、五五五
古川町	五、五八八
船津町	一〇、四七五
各村合計	三、四八八
長野縣	一、六六二
長野市	六、五五五
松本市	三、四七七
上田市	三、五五五
南佐久郡	七、六六六
白田町	三、八八八
中込町	五、一七七
野澤町	六、三三三
各村合計	五、四〇〇
北佐久郡	三、三三三
輕井澤町	五、三三〇
岩村田町	七、七五五

三

小諸町	二、七五五
各村合計	六、八四四
小縣郡	二、七、六〇〇
丸子町	三、七五五
長久保新町	一、四七七
長窪古町	二、七七五
各村合計	一〇、七〇〇
諏訪郡	一、七、五五五
上諏訪町	一〇、〇八八
下諏訪町	一、七、三三三
各村合計	一、五、五五五
上伊那郡	一、四、〇八八
伊那町	二、五、〇〇〇
高遠町	四、〇八八
各村合計	二、三、三三三
下伊那郡	一、七、七七五
飯田町	一、八、〇〇〇
各村合計	一、五、三三三
西筑摩郡	五、八八八
福島町	六、八八八
上松町	七、三三三
各村合計	四、七七五
東筑摩郡	二、八、八八八
南安曇郡	五、七七五

七三

豐科町	五、三六	屋代町	三、六三
穂高町	五、六六	松代町	八、〇七
各村合計	四、七六	各村合計	五、六七
北安曇郡	五、五三	上高井郡	五、四七
大町	八、五三	須坂町	一、二五
池田町	四、五九	各村合計	三、六四
各村合計	四、五八	下高井郡	三、四四
更級郡	七、三〇	中野町	八、七五
稻荷山町	三、七三	各村合計	四、六九
篠ノ井町	四、〇六	上水内郡	一〇、八五
各村合計	六、五七	下水内郡	四、八四
埴科郡	五、四四	飯山町	七、六〇
坂城町	五、〇八	各村合計	二、六四

## 質疑應答

問 鑛泉の種類と其分布を決定する條件 (文檢)  
答 鑛泉の種類は其の標準を異にするに従ひ種々あり

(一)湧出の仕方によれば

(イ)不斷泉、(ロ)脈搏泉(間歇噴湯泉)あり。

(二)温度によれば

(一)冷泉(湧出地の平均気温よりも低きもの)、(二)微温泉

(三)温泉

(三)固形分の性質によれば

(一)單純泉(溶解固形分千分一より少なきもの)  
(二)炭酸泉、(三)鹽類泉、(四)アルカリ泉、(五)舍利鹽泉  
(六)芒硝泉、(七)硫黄泉、(八)鐵泉あり。

次に鑛泉の分布を決定する條件は、(一)地質構造線、(二)火山脈、(三)斷層、(四)岩層の裂罅(節理)、(五)附近鑛床の分布、(六)岩脈、(七)地下水脈等である。

本邦山陰道や九州に於ける鑛泉の分布は、大體に於て地質構造線に平行で、是を横切る處の弱線との交又點附近から湧出するものが多い、又温泉獄や阿蘇、霧島等の火山地方に於ける温泉の分布は明かに火山脈と密接の關係がある、即ち温泉獄や阿蘇地方では主に東西で、霧島地方では北東と北西との兩方向がある、又斷層に沿ふて温泉の配列して居る例は、石川縣山中温泉や山形縣赤湯温泉がある、凡て鑛泉は岩盤の弱處から最も湧出し易い譯であるから、岩盤の裂罅(節理)は鑛泉の分布を決定するに當つて、重要な條件たる事勿論である、岩脈も有用鑛物の鑛床も、岩盤の裂罅に沿ふて存在するものが多いから、矢張是によりて鑛泉の分布を決定し得る場合がある、例せば大分縣馬上金山の鑛脈の走向は、別府温泉の分布と平行なものがあり、別府温泉場の西に在る木村金山では、坑内から數箇所温泉の湧き出た事がある、又地下割合に淺い處から湧き出る鑛泉は、地表に近い地下の水脈に影響せらるることが割合に多い譯であるから、此種の鑛泉の分布には、地下水脈の分布をも考察せねばならぬ。(石川)

問 地球の年齡に關する諸假説